大津百町まち遺産マップ

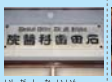
大津町家探訪地図　第5版

★百町の大津市景観重要広告物

この地域には、大津百町の繁栄の証として、価値のある屋外広告物が残されています。これらの広告物が、将来に亘って継承され続けていくことを願って、「大津市景観重要広告物」として市により指定されています。

八百与 B-2

阪本屋 B-2


石田歯科医院 C-2

鶴里堂 C-3

餅兵 C-3

凡例
- 百町の国登録有形文化財
- 百町の近代建築物
- 百町の景観重要広告物
- 百町の展示施設
- 百町の見どころ
- 交差点名
- 旧町名
- 通り名
- 公共駐車場（有料）
- インフォメーション

0　100　200　300m

別図

大津百町 まち遺産マップ 百

「大津百町（おおつひゃくちょう）」とは、江戸元禄時代、大津の町割が100町もあり、その繁栄ぶりを称することばです。大津の地名は、大きな港（津）に由来し、すでに平安時代、都への物資を中継する港として重視されていました。豊臣政権下に大津城が築かれた天正14年（1586）頃、現在の市街地が形成されました。関ヶ原合戦で城下町としての役割を終えると、城は膳所に移され、大津は、徳川政権下で、城下町から商業都市へと変貌。江戸幕府の直轄支配地（天領・てんりょう）として代官が置かれ、宿場町、港町、三井寺の門前町として発展。大津百町は、多様な町の姿を合わせもった複合都市として繁栄したといえます。大津百町のまちを地図を手に、ゆっくり歩いてお楽しみ下さい。

大津町家コラム　大津町家もののはじめ探訪

大津の中心市街地、いわゆる大津百町には、江戸時代末期から戦前までに建てられた伝統的な建築物である大津町家が多く残っています。東海道五十三次の宿場町でもあった大津は、距離だけではなく文化の嗜好性も京都に近いこともあり、大津町家は京町家の特徴を多く持っています。京都は幕末の戦乱期、特に元治元年（1864）の禁門の変の後、京都市中が大火に見舞われ、町家をはじめとする建物の多くが焼失しました。今残る京町家は、それ以降に建てられたものがほとんどですが、幸いにも大きな災害や戦乱に遭うことがなかった大津町家には、江戸後期の京町家の特徴が残っているとも言われており、とても貴重なものです。但し、主要な通りは、昭和初期、滋賀県の道路拡幅事業に伴い、「軒切り」という建物の正面を削り取ってしまう改造工事が行われたため、江戸期の外観を持つ大津町家は少ないことも特徴のひとつですが、内部は建てられた当初の意匠が多く残っています。もうひとつ、興味深いことは、「軒切り」をする前に、県が「軒切り」前の写真を撮影して、各所有者に渡したことです。その当時、写真はまだ貴重であったため、どの写真も当主や店の人、自慢できるものなどと一緒に記念撮影しました。京町通りのいくつかの家では、10月の大津祭の宵宮の日に、その当時の写真を表に展示していますので、往時の大津町家の外観を楽しむことができます。なお、この2枚の古写真の町家は、今も街中にあります。

百町の国登録有形文化財

橋本家住宅（旧正蔵坊）A-2

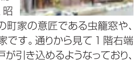
正蔵坊は、かつて三井寺五別所の一つ「微妙寺」の坊として正保元年（1645）に建造（再興）されたとものと推定されています（「園城寺文書」等の資料より）。戦前から既に一般住宅として使われてきましたが、建物の主要部分である本格的な書院造の「一の間」と庭は奇跡的に建設時のまま保存されてきました。登録有形文化財になったのを機に「二の間」を修復し、往事の姿を取り戻しました。また、同時期に築造されたと推定される池庭は、三橋式の切橋や豪華な枯滝を持ち、観音と不動明王を主題とした部分と、洞窟と浮島によって神仙蓬莱の世界を現している部分から構成される大変珍しい庭園です。

※家と庭は、各種イベントの開催時及び見学希望者（事前申込み要）に公開しています。

豆信 B-2

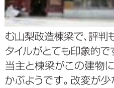
豆信は明治27年（1894）初代今井忠五郎が創業、大正7年（1918）に長女のためにこの料亭旅館を建てました。正面の浜通りが昭和9年に道路拡幅されたため、向かいに住んでいた大工、山岡長兵衛棟梁の手により、軒切りと同時に大改造し、虫籠窓だった正面の外観は、2階建て、ガラス窓の現在の姿になりました。旅館はやめていますが、2階の大広間や洗面などの内部にその名残を残しています。現在も料亭として使われ、大津では大変希少価値の高い料亭旅館建築で、表の門塀など3棟が国の登録有形文化財です。

木村家住宅（内部非公開）B-2



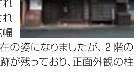
江戸後期より戦前まで材木商を営んでいた木村家は、複数の貸し家、材木納屋などを有していましたが、ほとんど除却され、この主屋など2棟が当時のまま残されています。正面の通りは、昭和初期の道路拡幅がなかったため、江戸末期の町家の意匠である虫籠窓や、つし2階建の、構造を内外にそのまま残す町家です。通りから見て1階右端の板張仕上げの壁の内側は、出格子部分の板戸が引き込めるようなっており、これは大津の町家の特徴の一つです。

阪本屋 B-2



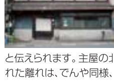
明治2年（1869）、膳所木下町にあった膳所藩お抱えの御用料亭「本家阪本屋」から、鮒ずしの販売を専門に行う店として分店し、初代内田太七が当地で開業。昭和初期の道路拡幅を機に、東隣の土地を取得し、昭和11年（1936）2敷地分の土地に店を新築しました。施工した大工は、船頭町に住む山梨政造棟梁で、評判もセンスも良く、表通りの2階の外壁に黒色のモザイクタイルがとても印象的です。また、ミセの和洋折衷の意匠も目を見張るもので、当主と棟梁がこの建物に趣味趣向を凝らして造り上げていった様子が目に浮かぶようです。改変が少なく、建てられた当初と同じように今でも鮒ずしを専門に行う店として営業していることも大変貴重です。

でんや Jrおで湖（中野家住宅）C-2



南隣に住んでいた中野庄蔵が、番頭の住居に使うため、下北国町の大工、横井勝治郎棟梁に注文し、明治43年（1910）5月に上棟した建物で、現在は町家居酒屋「でんや Jrおで湖」として活用されています。庄蔵は横井棟梁を本家から紹介されたと伝わります。主屋同様、昭和9年に道路拡幅時の軒切りに伴い、つし2階の虫籠窓から、現在の姿になりましたが、2階の小窓を開けると柱に貫や竹小舞など当時の痕跡が残っており、正面外観の柱を移設したことがわかります。

中野家住宅（内部非公開）C-2



江戸末期に後在家町より中野庄蔵が分家し、米問屋「中庄」を創業、明治15年（1882）から昭和14年（1939）まで営んでいました。奥行きの深い大きな町家で、明治5年（1872）に建てられた主屋は、当初、つし2階建でしたが、昭和9年の道路拡幅時の軒切りに伴い、2階建ての現在の姿になったと伝えられます。主屋の北側、「でんや」の奥、明治末期に隠居のために増築された離れは、でんや同様、大工、横井勝治郎棟梁の手によるものと思われます。

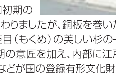
桐畑家住宅（内部非公開）C-2

通りに面して建てられた木造2階建の主屋と、江戸末期の平屋建の離れなど、3棟が国の登録有形文化財です。主屋は明治中期の町家で、昭和元年の道路拡幅時の軒切りを期に、観音寺の大工、田中棟梁につし2階から2階に大改造するように頼み、神仏への信仰心が篤かった当主は、社寺の意匠である斗供（ときょう）という組物を取り入れ、内部にも社寺を感じさせる意匠を凝らしています。坪庭と瀟洒な太鼓橋でつながれた離れは、元々、離れ座敷であり、昔は6帖2間を敷居をはずして12帖の広間にできるようになっていたそうです。

石田家住宅（石田歯科医院）（内部非公開）C-2

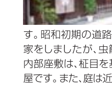
昭和12年（1937）に建てられた木造2階建の洋館と奥の平屋建の和館からなる医院併用住宅で、2棟が国の登録文化財です。長等の大工、木村政吉棟梁が設計図を描き、施工しました。通りから見える正面は、深緑色のスパニッシュ瓦に、薄桃色の建具枠、2階の中央部に小さなバルコニーがあり、手摺は緑色、外壁はセメントリシン材をグレーでまとめており、上品な色遣いが特徴的です。2階のバルコニーは大津祭の曳山を見るために造られ、昭和の初め頃から、祭りを2階から見物するようになったことがわかります。内部も和洋が上手く織り交ぜられ、当時の大津の大工が、和洋の意匠を扱うセンスがあったことを偲ばせます。

北川家住宅（内部非公開）C-3



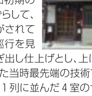
主屋内部の東半分は江戸末期に建築された町家で、明治20年頃に大工、横井勝治郎棟梁が西半分と通りに面したオモテ部分を増築、2軒分の間口を持つ町家に改造した建物です。正面は、昭和初期の道路拡幅時に軒切りし、ガラス戸や窓に変わりましたが、銅板を巻いた2階の深緑色の虫籠窓や、1階の格子、両端の杢目（もくめ）の美しい杉の一枚板が印象的です。明治中期の建築に、昭和初期の意匠を加え、内部に江戸末期の建物を残した3つの時代にまたがる主屋などが国の登録有形文化財です。

大津魚忠 C-3



明治38年（1905）、呉服商の住居として建てられた木造2階建の町家で、現在は料亭となっています。下北国町の大工、横井勝治郎棟梁が手がけた建物で、設計にも優れた才能を見せています。1階の木割の細い繊細な格子、内部の木の使い方に、横井棟梁の意匠の特徴を見ることができます。昭和初期の道路拡幅に伴い、オモテ部分を軒切りし、その後半間分、曳き家をしましたが、虫籠窓を残し、明治後期の商家の姿を良く留めています。内部座敷は、柾目を基調とした普請で、当主と棟梁のこだわりが感じられる主屋です。また、庭は近代庭園の先駆者、植治こと7代目小川治兵衛の作庭です。

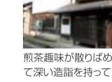
小川家住宅 C-3



江戸末期に建てられた間口2間半の町家で、大津の町家としては最小間口寸法と考えられます。昭和初期の道路拡幅時に、屋根の棟の位置を半間手前にずらして、通りに面して軒の高い2階になるような改造がされています。2階はガラス窓にして大津祭の曳山巡行を見物できるようにし、1階の腰付出窓は、下は研ぎ出し仕上げとし、上に間隔の粗い縦格子を入れてますが、昭和初期に流行した当時最先端の技術で造られた意匠です。間取りは、間口1間のトオリニワと1列に並んだ4室のザシキで構成されています。内部も昭和初期に改造されていると思われますが、荒神さん、おくどさん、井戸が残されています。

※公開施設ではありませんが、在宅時は、内部を見せていただくことができます。

川嶋家住宅（内部非公開）C-3



東海道に面した町家の隠居住宅として建てられた主屋と土蔵で、明治後期から昭和初期の建築と推測されます。土蔵は通りに面して建っており、大津では珍しい景観が印象に残ります。主屋は規模の小さな建物ですが、内部には、隠居した当主が客人を招き、文化人との交流を楽しんだ大広間や、煎茶趣味が散りばめられた茶室風のザシキがあり、大津の町衆が文化に対して深い造詣を持っていたことがわかります。

百町の近代建築物

日本聖公会大津聖マリア教会 C-3

日本聖公会京都教区の「大津講義所」として、明治24年（1892）に本格的に伝道が開始されました。その後、「淡海基督教会」、「大津基督教会」、「大津聖公会」など、たびたび教会の名称変更はありましたが、昭和6年（1931）に大工、宮川庄助棟梁により、現在の場所に礼拝堂が落成、戦中の混乱にも耐え、礼拝、伝道の場として活用されてきました。京阪浜大津駅から勧八通りを上ると、青緑色の三角屋根と十字架が正面に見え、2階の木製の上げ下げ窓、玄関欄間の鳩のステンドグラスが印象的です。

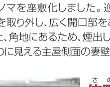
日本基督教団大津教会・愛光幼稚園 C-3

昭和3年（1928）、ヴォーリズ建築事務所の設計、長等の石倉工務店の施工で完成した木造2階建のキリスト教会です。教会の南側に幼稚園が併設されています。教会正面右側の鐘塔と玄関はひときわ特徴的で、渦巻き状の持ち送りや、浮き彫りの紋章が、凝ったつくりとなっています。鐘塔は上部に二連のアーチが四辺に付くロマネスク風です。ヴォーリズは教会を、満喜子婦人は幼児教育に情熱を燃やしましたが、この建物はそんな夫妻の理想を表現したものといえるでしょう。施工を請け負った石倉善四郎棟梁は、教会の信者であり、他にも大津市内にヴォーリズの設計で教会関係者の自宅を施工しています。

初田家住宅（内部非公開）C-3

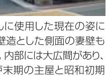
主屋や、東の通りに面する塀などが国の登録有形文化財で、いずれも江戸末期の建築と伝えられています。主屋は当初はつし2階でしたが、昭和9年の道路拡幅時に軒切りして、2階建に改造。その際、大津祭の曳山巡行を見物するため、2階のオモテノマを座敷化しました。巡行の際には、ガラス窓を取り外し、広く開口部をあけて、毛氈（もうせん）を垂らして見物します。また、角地にあるため、煙出しの小屋根（越し屋根）がよく見えます。また、東の通りに見える主屋側面の妻壁と塀瓦を乗せた高塀の焼杉板が印象的です。

佐野家住宅（内部非公開）C-3



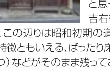
主屋は、鬼瓦銘や棟札から天保9年（1838）年に大工、岩佐棟梁により建てられた木造2階建の町家です。通りから見える正面は、昭和初期の道路拡幅時に大きく改造され、近年にも手が加えられていますが、内部には質の高い広間の座敷があり、当時の大工の粋や、多くの絵師文人のパトロンだった建築当時の当主の文化に対する造詣の深さが偲ばれ、国の登録有形文化財です。

森本家住宅（内部非公開）C-2



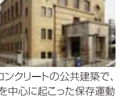
主屋は木造2階建の町家で鬼瓦銘から嘉永2年（1849）、棟札から大工、吉左衛門棟梁により建築されたことがわかっています。現在は、主家の手前に門構えのある塀と前栽がありますが、建設当初は、表屋造りという形式の大型町家でした。昭和初期の道路拡幅で表屋をなくした際に、当時の当主が石工だったこともあり、石畳や庭石をふんだんに使用した現在の姿になりました。角地にあるため、土蔵のように漆喰で大壁造とした側面の妻壁も印象的で、煙出しの小屋根（越し屋根）もよく見えます。内部には大広間があり、以前は琵琶湖の景色がよく望めたことでしょう。江戸末期の主屋と昭和初期の門塀が国の登録有形文化財です。

太田家住宅（内部非公開）E-2



この場所は、大津百町に隣接する松本村と称し、瓦の一大生産地として有名であったところです。主屋は明治3年（1870）2月に上棟、粉屋吉兵衛と息子新七の注文により、西隣の和泉町、美濃屋吉右衛門が手がけました。正面の通りは旧東海道ですが、この辺りは昭和初期の道路拡幅がなかったため、明治初期の大津の町家の特徴ともいえる、ばったり床机（しょうぎ）、つし2階の虫籠窓、袖卯建（そでうだつ）などがそのまま残っており、往時の町並みを想像させる建物です。

大津市旧大津公会堂 C-2



昭和9年（1934）に建設された旧大津公会堂は、名称や用途を様々に変えながら市民の交流の場として親しまれて来ました。縦長の窓など直線的なデザインを基本に、丸窓や半円形のアーチ窓が設けられ、外壁には昭和初期に流行した縦線模様のスクラッチタイルが張られている鉄筋コンクリートの公共建築で、国の登録有形文化財です。平成15年から地域住民を中心に起こった保存運動の後押しを受け、大津市の中心市街地の賑わいを取り戻すための集客交流拠点として整備され、建築当時の洋館の雰囲気をそのままに、平成22年に4つの飲食店が入った交流・商業施設として大きく生まれ変わりました。

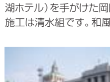
カトリック大津教会 F-4

京都のあめりか屋が大林組の下請けとして施工、昭和14年（1939）に竣工しました。外観は、普通の教会と異なり、日本建築そのものですが、これはバーン司教の信念によるもので、信仰の土着化という立場から教会の建物は日本風のものであるべきだという考えに基づき建設されました。聖堂はバシリカ式の教会を基本としつつ、変化に富んだ青瓦の屋根は印象的で、内部にはカラフルなタイルを多用し、とても美しい建物です。布教のために日本人に親しみのある教会を造ろうとしたバーン司教の思いを建築技術者が匠に表現した建物といえるでしょう。

滋賀県体育文化館（旧武徳殿）（内部非公開）D-3

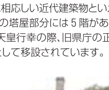
明治27年（1895）に設立された大日本武徳会の滋賀県支部として昭和12年（1937）に建てられました。一見城郭のような純和風ですが、鉄筋コンクリート造で、屋根の構造は鉄骨です。内部の柔剣道場を広大な無柱空間とするために、こうした造りとなっていますが、外観は自然な和風に見せるため、軒先の垂木は木材としています。設計は三井道男で、びわ湖大津館（旧琵琶湖ホテル）を手がけた岡田信一郎建築事務所に昭和9年まで勤めていました。施工は清水組です。和風の近代化のひとつの頂点ともいえる建物です。

滋賀県庁本館 D-3



戦前最後の大建築で、昭和14年（1939）に竣工。昭和12年（1937）に軍需資材の節約のために施行された「鉄鋼工作物築造許可規則」を間一髪すり抜けて建設されました。設計は日比谷公会堂や大隈記念講堂などを手掛けた佐藤功一と大阪で國枝工務所を自営し、濃密な装飾を凝らす作風で知られた國枝博のふたりで施工は大林組です。大きく翼部をのばした水平感と柱の縦の線の反復とのバランスや内部の装飾が素晴らしく、格調を持ったまさに県政を司る機関に相応しい近代建築物といえます。鉄筋コンクリート造4階建ですが、正面中央の塔屋部分には5階があり、明治23年（1890）4月、琵琶湖疏水開通式に明治天皇行幸の際、旧県庁の正庁が御座所となり、これを保存すべく、聖蹟記念室として移設されています。

宮本家住宅（内部非公開）B-4

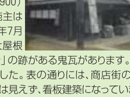


昭和5年（1930）、ヴォーリズ建築事務所の設計、長等の石倉工務店の施工で完成した木造2階建の洋館住宅です。宮本文治郎はウィリアム・メレル・ヴォーリズが明治38年（1905）滋賀県立商業学校（現八幡商業高等学校）に着任した際、通訳を務め、その後も深い信頼関係にありました。屋根はスペイン瓦葺き、外壁はスタッコ塗、縦長窓や半円アーチ窓を並べ、煙突を二本設けています。居間から琵琶湖が一望できるように工夫され、食堂兼台所は使いやすさを重視、建物と調和が図られた建具や調度品も保存良好で、居間のアルコーブや暖炉、緩やかな階段などにヴォーリズ建築の特徴がよく残っています。

旧多田家住宅（内部非公開）C-3

下百石町の小路にある間口3間半の町家で、いつ誰が建てたか定かではありませんが、戦後独立して呉服の商いを始めた多田佐一はこの町家をとても気に入り購入しました。1階に出格子、駒寄、2階に虫籠窓、袖卯建といった明治期の大津町家の特徴である意匠をよく残しています。内部のトオリニワにも、黒いモザイクタイルを使ったおくどさんや井戸があります。

大津百町館 C-2



大津百町館は、唯一、大津町家を見学できる施設です。最近、棟札が発見され、明治32年（1899）12月大工棟梁　太田嘉七により棟上げされ、明治33年（1900）に完成したことが分かりました。施主は呉服屋を営む今井辰次郎、明治32年7月の家相図が残っています。また、大屋根には文化13年（1816）今井家の「今」の跡がある鬼瓦があります。大正から昭和期には文泉堂という本屋でした。表の通りには、商店街のアーケードが設置されているため、屋根瓦は見えず、看板建築になっていますが、昭和初期は上の写真のような外観でした。

内部に入ると井戸、おくどさんが残っており、吹抜のトオリニワの大空間や、大広間のザシキは商家の趣を残し、落ち着いた佇まいの中庭は心を癒してくれます。南北の通りは、昭和初期に道路拡幅があったため、曳き家をしてナカノマを切り縮めています。また、同時期に離れが新築されました。

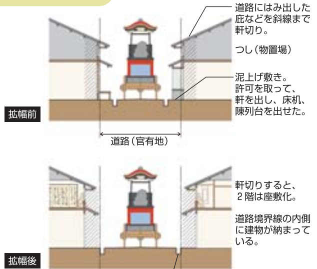
※入館無料。月曜、お盆、年末年始は休館ですが、不定休のため、事前にお問い合わせ下さい。
TEL077-527-3636（大津の町家を考える会）

大津町家コラム　大津町家の外観を比べてみよう

大津町家の外観は、大きく分けると時代の異なる2つのタイプがあります。ひとつは京町家ととてもよく似た外観で、道路拡幅がなかったため、左の写真のように、1階の「出格子」「ばったり床机」、2階の「虫籠窓」「袖卯建」に代表される建てられた当時の意匠を残しているタイプで、多くは江戸末期や明治期の外観です。同じく道路拡幅に伴う軒切り改造工事をしましたが、江戸末期や明治期の外観に倣ったものもこのタイプに入ります。もうひとつは、昭和初期、道路拡幅に伴い、軒切り改造工事をした際に、新しい意匠や材料を取り入れた外観のタイプです。右の写真のように、1階の「腰付出窓」、2階の「ガラス窓」「肘掛」が昭和初期の特徴です。特に「腰付出窓」は、雨で傷みやすかった「出格子」の改良版ともいえ、腰部分に御影石を用いたものが主流ですが、御影石に似せた「人造石研ぎ出し仕上げ」という左官仕上げや、小さい正方形のモザイクタイルを貼ったものもあり、昭和初期にはいろんな材料や工法が入ってきたことが分かります。また、窓の格子は細かい桟から太格子や鉄格子になっています。大津町家の外観は、1階と2階で異なる時代性を持つものもあり、通りから違いを楽しみながら、町歩きするのも一興です。

大津町家コラム　大津町家『軒切り』の真実

通りに面した大津町家の外観は、昭和初期に大きく変わりました。浜通り、京町通り、中町通りの順に、道路拡幅工事が実施され、町家の正面を切り取ることになったのです。これは大津に限ったことでなく、日本の多くの町が近代都市となる過程で行われ、地元では「軒切り」という言葉で伝わっていますが、その実態は忘れられてしまいました。この道路拡幅は正確に言うと「軒下地として利用していた官有地道路敷きの占用取り消しに伴う道路拡幅」といいます。それまで、町家の軒下は、官有地つまり道路の一部で、雨水の側溝が今よりも道路中心寄りにありました。現在のように道は舗装されていないので、側溝に溜まる泥掃除は町家の住民がしていました。側溝から上げた泥を仮置きした軒下を「泥上げ敷き」といい、代わりに占用の許可を取れば、ばったり床几や、陳列台、庇を設けることができました。昭和初期、交通手段が車に代わり道路を広げる必要性が高まり、泥上げ敷きを廃止し、側溝を道路境界線寄りにずらし、実質的な道路拡幅を図ることになりました。道路所有者である滋賀県や大津市から各家に「占用を取り消すので、1年以内に軒下地として利用している部分を除却せよ」という文書が出されます。これにより、多くの町家は「軒切り」という形で町家を切り縮めることになったのです。軒切りせずに内部で縮める改造や、建て替えたところもあります。右図のように、軒切りした町家は、虫籠窓からガラス窓に変えて、2階のオモテはつし（物置場）から居室となります。さらに大津祭の曳山巡行路に面する町家では、床の間を設けて座敷化し、2階から曳山を見るようになりました。



百町の社寺・史跡

園城寺（三井寺）A-1

天台寺門宗総本山。大友皇子の子、与多王（よたおう）の寄進により創建し、後の貞観8年（866）円珍が天台別院として再興しました。同寺の湧水を天智・天武・持統の三天皇の産湯としたことから御井寺（みいのてら）と呼ばれています。国宝の金堂を始め、数多くの指定文化財の建造物が建ち並んでいます。

小関越道標 A-2

小関越から園城寺（三井寺）への分岐点に立ち、「左り三井寺　是より半丁」「右小関越三条五条いまくま　京道」「右三井寺」と刻まれています。西国三十三所観音巡礼の三井寺と今熊野観音寺を指すことから、この道が巡礼道であったことを示しています。市指定有形民俗文化財。

長等神社 A-2

天智天皇が大津京鎮護として、須佐之男命を長等山に祀られたのが創建。貞観2年（669）日吉山王神を勧請した園城寺の守護神となりました。明治38年（1905）竣工の楼門は市指定文化財。また、境内奥の馬神神社は「馬の神社」として有名です。

琵琶湖疏水 B-2

明治時代、琵琶湖の水を京都へ通すために作られた水路で、京都市の飲料水・発電や物資輸送、農業用水などに利用するために立案されました。第1疏水は明治18年（1885）、青年技師田邉朔郎の指導のもとに着工、同23年に開通。第2疏水は、明治45年に完成をみています。国指定史跡。

近松寺（高観音）B-3

園城寺（三井寺）の五別所の一つで、別名は高観音。建築は、本堂は享保元年（1716）、阿弥陀堂は嘉永3年（1805）で、市指定文化財です。本堂は江戸時代の仏堂形式を知る上で貴重です。また、ここから見おろす琵琶湖と大津の町は、古くから人々に親しまれています。

本長寺 B-3

永禄5年（1562）、等覚院日壮上人により創建された日蓮宗寺院。大津代官であった小野、石原両氏の菩提寺で、境内の墓地には小野氏歴代の墓が並んでいます。また松尾芭蕉の門人で、大津の医師であった江左尚白（えさしょうはく）の墓もあります。

犬塚の欅 B-3

本願寺中興の祖である蓮如（1415～1499）が大津に滞在中、法敵に毒殺を謀られたとき、身代りとなって死んだ忠犬を葬った塚に植えられたと伝えられます。この伝承によれば、樹齢は500年を超えることとなります。市指定文化財。

大津宿本陣跡 B-3

本陣は、江戸時代に宿場におかれた大名などの宿泊施設。大津宿には2軒の本陣があり、この地はその内の大塚嘉右衛門宅です。当時の本陣は3階の楼上からの琵琶湖の眺めが絶景だったといわれています。建物は現存せず、明治天皇聖跡碑が建っています。

関寺の牛塔 B-3

長安寺境内にある石造宝塔。昔この地に関寺という大寺がありましたが、平安時代中頃に地震で倒壊。復旧工事の際、仏の化身である一頭の牛が資材運搬を手伝い、完了と共に死んだことから、供養のために建てられたといいます。高さ3.3メートル。鎌倉時代のもので、国指定重要文化財。

関蝉丸神社 B-4 別図

小野岑守により822年に旅人を守る神を祀ったのに始まるとされます。平安中期の琵琶法師・歌人である蝉丸が逢坂山に住み上下社に祀られるようになりました。971年には綸旨により音曲芸能の神として信仰されるようになりました。逢坂一丁目に上下の二社があり、下社の時雨燈籠は国指定文化財です。

逢坂の関 別図

古代から交通の要所とされ、延暦14年（795）には関所の前身ともいえる施設が置かれ、その後、平安時代の中頃には不破・鈴鹿と並ぶ三関の一つとして朝廷に重視されていました。現在の峠には、関跡碑とともに逢坂関記念公園が整備されています。

旧逢坂山トンネル 別図

鉄道草創期にあたる明治13年（1880）、大津・京都間に完成した全長664メートルのトンネル。当時、鉄道敷設は外国人が指導していましたが、日本人のみの手で施工された日本最初のトンネルとして、鉄道記念物になっています。大正10年（1921）の路線変更により廃止され、現在は東口のみが残っています。

大津城跡 C-2

天正14年（1586）頃、豊臣秀吉の家臣浅野長吉（長政）により築かれた城。今の明日都浜大津の湖岸側一帯が本丸でした。慶長5年（1600）の関が原合戦を東軍（家康軍）の勝利に導いた大津籠城戦は有名です。戦後、天守は彦根城に移築されました。

彦田稲荷神社 C-2

江戸時代、浜通り一帯には幕府や諸藩の蔵屋敷が立ち並んでいました。このあたりは、彦根藩の蔵屋敷があったところで、元はその敷地内に祀られていたと伝えられています。

大津事件の碑 C-3

明治24年（1891）、来日したロシア皇太子ニコライが、警備中の巡査津田三蔵に斬りつけられた事件。ロシアを恐れる明治政府は、津田三蔵を大逆罪で死刑にするよう迫りましたが、大審院長の児島惟謙の主張により、刑法どおり無期徒刑とし、司法権の独立を貫きました。事件現場には、「此附近露国皇太子遭難之地」の碑が建っています。

大津御用米会所跡 C-2

江戸時代、大津には北国・東国の諸大名の領地から、年貢米を始めとする大量の物資が琵琶湖水運によって集められていました。この場所には、大津御用米会所が設けられ、米の相場がたち、盛んに取引が行われていました。今でも残る石畳に往時の米取引の面影が偲ばれます。

蛭子神社 C-3

由来は不詳ですが、坂本に榊宮社の神木が倒れ、この木から神像を作り、これを祀っていると言われています。かつては「胡神社」、「夷神社」とも記したと言います。また、4月3日の日吉山王祭の大榊神事に際して、天孫神社への渡御の途中、大榊はこの神社に立ち寄り祈祷が行われます。

大津別院 C-3

浄土真宗大谷派の別院。慶長5年（1600）に石山本願寺で織田信長に徹底抗戦した教如（きょうにょ）が創建。本堂は慶安2年（1649）の建築です。また書院は、寛文2年（1662）の大地震で倒壊後、同10年に再建。書院は桃山建築の素晴らしさがよく表れています。本堂、書院は国指定重要文化財。

華階寺のいちょう C-3

中央大通りの分離帯に立つ2株のいちょう。道路建設前、この場所は華階寺境内でした。天文元年（1532）、華階寺の開基とともに、植えられたと伝えられます。今も大津駅前のシンボルとして偉容を誇りますが、湖上交通の盛んであった頃も、よい目標となっていたようです。市指定文化財。

天孫神社 C-3

天孫神社は、かつて四宮神社・天孫四宮大明神と称され、明治初年に現在の社名となりましたが、現在も「四宮さん」の名で呼ばれています。秋の例祭は湖国三大祭りの一つとして数えられる「大津祭」です。毎月第3土曜には、手づくり市「大津百町市」が開催されています。（1・8月休み）

小舟入の常夜燈 D-3

文化5年（1808）、京都の講中が伊勢両宮の常夜燈として建立。このあたりには、かつて琵琶湖の入り江があり、常夜燈は船の目印となっていました。基壇部分には京都と大津の世話人と石工の名前が刻まれています。市指定有形民俗文化財。

石場の常夜燈 E-3

石場と対岸の矢橋（やばせ）間の渡し船の目印として、幕末の弘化二年(1845)に大津・京・大坂などの船仲間によって建立された、高さ8.4mの常夜燈。湖岸の埋め立てとともに2度移転しました。

平野神社 E-4

創建は大津宮の頃と伝えられ、7世紀の中頃、皇極（こうぎょく）天皇の代に京都西洞院滋野井にまつられた蹴鞠（けまり）の神、精大明神を松本の狐谷に移し、後の天正2年（1574）現在地に再度移しました。毎年8月9日、古式ゆかしい蹴鞠の奉納があります。

義仲寺 F-4

義仲寺は源義仲（木曽義仲）を葬った塚のあるところから名付けられています。また、松尾芭蕉が滞在し、元禄7年（1694）、大坂で客死すると遺言により葬られたことでも知られます。境内は国指定史跡。

平成27年3月（第5版）発行・編集:大津市中心市街地活性化協議会　協力:株式会社まちづくり大津、大津市（歴史博物館、都市再生課）　参考図書:湖国のモダン建築